

ネットワーク資料保存 第125号 2021年10月

日本図書館協会
資料保存委員会

大量脱酸処理（乾式アンモニア・酸化エチレン法：DAE法）の追跡調査報告

須藤 猛彦

1. はじめに

弊社・日本ファイリングは脱酸性化処理法である乾式アンモニア・酸化エチレン法（DAE法）の本格的商業稼働を1999年から開始した。2020年度末までの21年間での処理実績は46万冊にもものぼる。本格稼働以降も実験、研究を繰り返しながら更なる改良を

加えたことにより、現在ではより品質の優れた処理プロセスに到達している。処理効果は強制劣化試験等により東京農工大学農学部セルロース材料工学研究室（現環境資源科学科）における開発段階より実証されてきたが経時劣化による評価は経過時間が少ないことにより、今までほとんど実施されたことがなかった。2018年に東京都立中央図書館の要請により同館の資料を拝借し、改めての経時劣化調査を行ったので本稿にて報告するものである。

2. 調査の詳細

- ① 試験日時：2018年7月25日
- ② 試験項目及び分析機器・分析方法

試験名	機器名称	メーカー名	型式	測定方法
pH試験	twin pH計	HORIBA	B202	ガラス電極方式
引裂き強さ試験	TEARING TESTER	熊谷理機工業株式会社	0～33型	JIS P8116-1994に基づく



エルメンドルフ引裂き試験機
（写真は熊谷理機工業株式のHPより転載）

CONTENTS

大量脱酸処理（乾式アンモニア・酸化エチレン法：DAE法）の追跡調査報告……………須藤猛彦	1
追悼 安江明夫さん 資料保存関係者より その2（小泉徹、竹内秀樹、小島浩之）……………	3
理論と実践、二刀流の軌跡—安江明夫（資料保存関係）略年譜—小出（安江）いずみ、小林直子	8

※ 紙の評価方法は主に pH、耐折強さ、引裂き強さ、ゼロスパン引張強さ等があるが、劣化紙の評価には引裂き強さが適している。引裂き強さ試験は紙の他にプラスチックフィルム等の引裂き強さを求める試験で、あらかじめ既定のスリットを入れた試験片を扇型の振り子を開放し引裂きデータを読み取る。

弊社保有のエルメンドルフ引裂き試験機は一般の引裂き試験機では測定し難い劣化紙を測定できるものである。引裂き強さの単位は mN (ミリニュートン) で閲覧に供することができる限界は 150mN とされている。

③ 試験体

- 試料 No.1: 酸性低質紙書籍 (刊行年: 1960 年)
 - 試料 No.2: 酸性中質紙書籍 (刊行年: 1972 年)
- いずれも東京都立中央図書館提供資料で、裁断して、2000 年 7 月に DAE 処理した「処理済み」と「未処理」の 2 種類がある。同館地下 1 階の事務室内にて展示されていた。保存環境は特に恒温恒湿されたものではなく、室内環境に準じたもの。
- 試料 No.3: 弊社のテストブック
- 処理ロット毎のデータ採取の為に同時処理される製本された紙。日本製紙(株)1998 年 7 月製造 NPI 酸性上質紙 (pH 3.5~4.7) A-4 版 400 頁。試料 No.1、No.2 と同時処理、処理後は DAE 処理前室に保管。前室の保存環境はお客様の資料がある時以外は換気のみ。

3. 試験状況

《pH 試験》

試料 No.1 未処理



No.1 処理済み

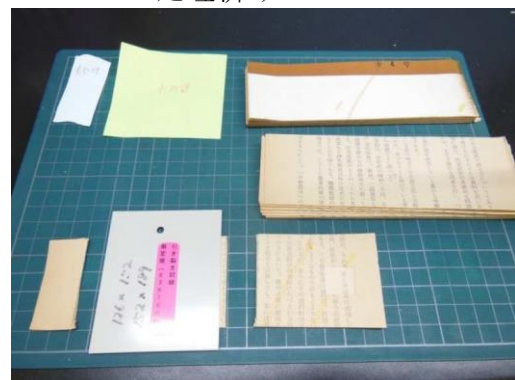


《引裂き試験》～試験片

試料 No.2 未処理



No.2 処理済み



4. 試験結果

	検体名	処理・未処理の区分	pH	引裂き強さ (mN)	測定日
1	試料 No.1 酸性低質紙 (1960 年刊)	未処理	3.5	387.7	今回 (2018 年 7 月)
		処理済み (2000 年 7 月)	5.3	459.1	
2	試料 No.2 酸性中質紙 (1972 年刊)	未処理	4.4	475.2	
		処理済み (2000 年 7 月)	6.8	496.8	
3	試料 No.3 酸性上質紙	処理済み (2000 年 7 月)	8.4	462.3	
		処理済み (2000 年 7 月)	9.8	—	

5. 考察

今回、DAE 処理後 18 年が経過した処理済み資料の経時劣化（劣化抑制効果）を検証するために、未処理資料と処理済み資料に対し pH 値と引裂き強さを比較測定した。

結果は試料 No.1 の酸性低質紙では pH 値は未処理資料では 3.5 に対し処理済み資料では 5.3 を示した。既に当社でも知見を得ているが低級紙はリグニンリッチであり、その特性上、中質紙や上質紙に比べ処理後の pH の上昇が小さい。もともとの資料の酸性度が高く、処理後も酸性領域を示しているが引裂き強さ（紙力）が約 1.2 倍弱となっており十分な劣化抑制効果を現時点でも保持していると考えられる。

次に酸性中質紙の場合は未処理資料の pH 値が 4.4 に対して処理済み資料は 6.8 とほぼ

中性領域を示している。引裂き強さの上昇は小さいが低質紙同様に劣化抑制効果を維持している。当社のテストブックの pH は 8.4 であり十分なアルカリリザーブが残留しているのがわかる。

6. おわりに

今回の調査は東京都立中央図書館の要請を受け行ったが、これを機会に強制劣化試験及び経時劣化試験を定期的実施し継続的な脱酸性化処理の有効性検証のため、またお客様に同処理を検討して頂くための重要なデータとして公開して参ります。

(すどう たけひこ・

日本ファイリング株式会社)

追悼 安江明夫さん 資料保存関係者より その2

2021 年 1 月 29 日、日本の図書館における資料保存の草分け的な存在であり、資料保存委員会の初代委員長を務められました安江明夫氏が 75 歳でご逝去されました。資料保存界を牽引されてきた氏に対し、資料保存関係の方々に追悼文をお願いしたところ、多くの方よりお寄せいただきました。前号と今号の 2 回に分けて掲載したいと存じます。

安江さんを偲んで：

日本の図書館の資料保存、『ネットワーク資料保存』第一世代のころ

小泉 徹

酸性紙問題と資料保存研究会

金谷博雄氏の『本を残す：用紙の酸性問題資料集』という小冊子が出版されたのが1982年、40年近く前になる。安江明夫さんを知るようになったのもその頃である。発端は、金谷さんの私家版定期刊行物『ゆずり葉』（日本で初めての中性の書籍用紙刊行物？）の購読者間の「繋がりがり」であった。私も金谷さんと知り合うようになったが、安江さんも金谷さんの資料集の読者でもあった。

私は当時20代で安江さんより少し若い、ちょうど職場の立教大学図書館から海外研修の機会を貰い「酸性紙問題」も渡米のテーマの一つにしていた。私が何かに載せた文章だったのだろうか、安江さんから職場に電話をいただいて褒めていただくと同時に文中の「酸化」と「酸加水分解」の違いを親切に指摘していただいたのが初めての安江さんとの出会いだった。



1996年 IFLA 資料保存分科会で発表中の安江氏

「酸性紙問題」は、米国議会図書館が NASA と協力して開発した大量脱酸装置などと共にマスコミに大きく報道された。図書館でも講演会などでそうしたテーマになると、図書館・文書館員、製紙業、印刷業、製本家、書店、ジャーナリストや科学者など、それまで思いもかけなかった人たちが集まった。一度は造幣局の方が聴きに來られていて驚いたことがある。この追悼特集でも語られているが、よく「業際」「学際」という言葉が語られた。

安江さんの人柄と功績をひと言で表すならば何だろう。私には「分け隔てなく」という言葉が浮かぶ。この誌面をお読みの方ならご存知と思う本であるが、『図書館と資料保存—酸性紙問題からの10年の歩み』（安江明夫・木部徹・原田淳夫編著 雄松堂出版1995）を見ると、そこに執筆されている方々の分野の多彩さに驚く。

日本図書館協会でも「紙」がテーマだけに「酸性紙問題」への対応はそれほど遅くはなかった。1984年に大阪で開かれた第70回全国図書館大会で始めて資料保存をテーマに「第10分科会：図書館資料の保存と利用をいかに調和させていくか」が慶應義塾大学の上田修一氏の司会で開かれ、分科会参加者によって日図協内に常置の正式な「資料保存委員会」を発足させることが分科会として提言された。

その後、上田修一氏・安江明夫氏・原田淳夫氏・私の4名で日図協事務局長の栗原均氏に面会し、栗原氏からは、まず「研究会」からスタートさせてはどうか、日図協の会議室や刊行物の住所などは使用してよいとの回答があった。世田谷区三宿にあった協会でも月1回の定例会と、隔月で「資料保存研究会ニューズレター」の発行を始めた。

定例会は安江さんと原田氏が担当し、「ニューズレター」は私が担当して忠平美幸さん（元早稲田大学図書館員で、現在は優れた翻訳家）と相沢元子さん（当時製本家）と共に、当時のことなので NEC のワープロ「文豪」（！）を買い揃えて編集に携わったのも懐かしい思い出である。現在は、日図協の資料保存委員会 HP の「ネットワーク資料保存総目次」から、『資料保存研究会ニューズレター』の各号の目次だけを参照することができる。

『ネットワーク資料保存』への新装開店

「資料保存研究会ニューズレター」は1-25号まで1985年から1990年まで続いたが、先に書いたように「酸性紙問題」は想定以上に幅広くそれぞれに専門的な分野だった。

資料保存対策には、「大量脱酸処理」だけでなく「少量脱酸処理」もある。欧米の図書館で古くからある「製本修復技術」もあれば、日本でも「虫損繕い」のような伝統技術も、「マイクロフィルム」による代替保存も、さらに大きな専門分野の「デジタル保存」もある。近年では思いもかけなかった東日本大津波で「災害対策への対応」も大きな保存対策の対応のひとつとして定着している。

勉強会的な「研究会」では、こうした状況拡大に立ちゆかなくなり、というか、安江さんの

言葉としては「新装開店」して1984年の大会参加者の提言を実現したのが1990年の「資料保存委員会」である。ほぼ旧研究会メンバーが委員になったが、最初の委員の集まりでは、安江さんに何とか頼み込んで初代委員長になってもらうことになった。組織名が変わったので『資料保存研究会ニューズレター』も変えなくてはいけなくなったが、『ネットワーク資料保存』というタイトルを考えたのも安江さんである。私は最初ちょっと違和感を持ったが、よく考えてみると成程と思った。そのため『資料保存研究会ニューズレター』は1-25号までとなり、『ネットワーク資料保存』と改題して26号が初号になる。いわゆる巻次継承という書誌情報となった。

先ほど挙げた『図書館と資料保存—酸性紙問題からの10年』は、そういう意味で第一世代の総決算的な意味もある図書だ。同書中にある国立国会図書館資料保存対策室による「第5回新刊図書pH値測定結果報告」を見ると中性紙の割合は約7割となっており、酸性紙対策班の「資料の劣化資料状況報告」ではサンプリング調査によって欧米の図書と同様に国会図書館でも100年から150年ほど経った図書の劣化が甚だしい、といった結果が報告されている。

委員会となってからはその後活動を担う顔ぶれも変わっていき、私も資料保存委員会を離れて国際交流委員会に加わるようになり、安江さんと会うことも少なくなってしまう。

国際図書館連盟での安江さん

安江さんの資料保存活動についてもうひとつだけ書いておきたい。安江さんは資料保存委員会だけでなく「国際図書館連盟」(IFLA)内の「資料保存分科会(PCS)」の常任委員を1987-1995年の8年間勤められた。IFLAの中で他にも国立国会図書館を中心にした「資料保存コア活動(PAC)」にも関わられていた。冒頭に掲載したのは、たまたまご一緒した1996年IFLA中国大会の資料保存分科会(PCS)での安江さんの発表風景である。

安江さんは、理論的に保存と保管の違い、保存管理 Preservation の重要性を強調されたこと、一方で従来からの保存技術 Conservation に対しても敬意を持って接しておられたのを思い出す。(これは、ご出身の金沢で金箔工芸の御家系だったことが大きいかもしれない。)

図書館員の力だけでなく館外から図書館の資料保存に貢献してくれた方も多い。『CAP 本の保存のための海外ニューズ月報』を発行し「(有)資料保存器財」の会社を設立した木部徹氏、また前号で神谷修治氏が書かれていたように製紙

業界全体による中性紙開発など、各業界や学会等の力が図書館の資料保存の様態を変えたと思う。第一世代の頃には日本で見る事のなかったグレイ色の中性紙製の段ボール「保存箱」も今では珍しくなくなった。安江さんは自分で作る側にはならなかったが、多方面に触発を与えたコーディネーター、あるいは資料保存のコンダクターだったと思う。

退職後も資料保存の普及に尽力されていた。稀有な方を亡くしたと思う。

※ 執筆協力: 本稿は、元資料保存委員会委員長の原田淳夫氏(元神奈川県立図書館)にも当時の話をお聞きしつつ執筆させていただきました。

(こいずみ・とおる 元立教大学図書館)

安江さんのお言葉を心に刻んで

竹内秀樹

安江さんは、国立国会図書館の副館長をお務めになられた後、退職されました。退職後も、よく図書館にいらして資料を探していらっしやいました。奥様とご一緒に資料探索されているお姿もよく拝見しました。フロアにいる私に手を挙げてお声をかけてくださっていたのはついこの前のことで、本当に信じられない思いです。図書館で安江さんのお姿を拝することができないのはさみしく残念でなりません。

私が安江さんにお世話になったのは、1993年に国立国会図書館へ入館したときからです。新人だった私は、逐次刊行物部複写課に配属されました。そのとき安江さんは、私が配属された逐次刊行物部の筆頭課長に当たる雑誌課長をされていました。資料保存課長を3年間お務めになった後のことです。雑誌課長として取り組まれていたお仕事は多々ありましたが、その中で新人の私に印象的だったのは、雑誌の簡略製本の導入でした。合冊製本を要する大量の雑誌に対して、従来の本製本のみでは製本滞貨が発生していたため、より安価で施工期間が短い製本方法として導入されたものでした。安江さんは、複数の方法で簡略製本されたサンプルを見せて部内外の職員の意見を熱心に聞いていました。新人の私にも気さくに声をかけてくださり、そ

それぞれの製本方法の長短を説明してくださいました。資料保存に関心を持たせ、理解させ、納得させる、安江さんは資料保存のプロモーターでした。

国立国会図書館内には資料保存の勉強会（館内サークル）もあり、年齢やポジションに関係なく、皆で学び合い、資料保存の輪を広げておられました。人を惹きつけるお人柄とご見識の賜物だったのだと思います。私も配属課の先輩にお声をかけていただき、勉強会に参加させていただきました。こうしたことが資料保存に関心を持つきっかけになりました。

私は、1997年から2000年まで資料保存委員会の委員をさせていただきました。1998年には全国図書館大会が秋田県で開催され、第11分科会（資料保存）の運営を担当しました。この分科会は私にとって心に残るものとなりました。この年のテーマは「資料保存のためのメディア変換—デジタル時代の資料保存戦略—」でした。基調講演を安江さんをお願いしました。当時、安江さんは総務部副部長のポジションにあって多忙でいらしたのですが、快くお引き受けくださいました。「メディア変換の why と how」という演題でお話くださいました。当時はマイクロ化が主流の時代で、デジタル化は一部で先駆的な取組が行われていた頃でした。安江さんは、「どのような技術があり、それをどのように使うのかという問題とともに、なぜ、何を、誰のために保存するのかを問うことがメディア変換の大事なポイントである。図書館ではたくさんの資料が保存のため、利用のためにメディア変換を待っており、新しい枠組みでの取組が求められる。」と訴えておられました。

この「なぜ、何を、誰のために」という問いが資料保存のパラダイムを転換させたと安江さんはいいます。図書館の基盤である蔵書が酸によって崩壊していくという問題に直面し、「なぜ、何を、誰のために」保存するのかを問う中から、「利用のための資料保存」というコンセプトを創り出し、提唱したのは安江さんでした。この問いの重要性はデジタルの時代を迎えた今も変わることはありません。安江さんは四半世紀前から資料保存のニューフロンティアの一つとして電子、デジタルの問題を指摘されていました。

本誌の資料保存委員会発足10周年記念号の「特集：資料保存の10年」に寄稿された安江さんは、その中で、資料保存委員会に対して、次のようにメッセージを書かれています。「新しい領域を開拓するパイオニアの意気込みで、澁刺

と取り組まれるよう期待している。Keep going! しっかり資料保存委員会!!」安江さんらしい元気の出るお言葉です。

これは資料保存委員会に対する安江さんの激励ですが、資料保存委員会だけでなく資料保存に取り組む私たち全員への励ましだと受け止めて、このお言葉を心に刻んで、これからの職業人生に取り組んでまいりたいと思います。

安江明夫「メディア変換の why と how」『平成10年度全国図書館大会記録』p.214-215（1999）

安江明夫「Keep going!!」『ネットワーク資料保存』第65号 p.1-3（2001）

（たけうち ひでき・国立国会図書館）

追悼 安江明夫さん

小島浩之

私の安江さんへの哀悼の思いは既に『東京大学経済学部資料室年報』第11号の「編集後記」に記しましたので、本誌に公開先のリンクを掲載させていただくことで、執筆に代えさせていただきます。

<http://hdl.handle.net/2261/0002000793>

謹んで安江明夫さんのご冥福をお祈りいたします。

（こじま ひろゆき・東京大学経済学部資料室）

理論と実践、二刀流の軌跡 —安江明夫（資料保存関係）略年譜—

執筆：小出（安江）いずみ、小林直子

2号続いて追悼文が寄せられた安江明夫の略年譜を編みました。その足跡をたどると、個人の年譜でありながら、そのまま日本の図書館の資料保存の歴史を見るようです。資料保存の流れを把握するのに役立つと思われる事項については、直接の関与がないものも▽を付して記載しました。事項への関与・役割は<>で示しました。事項の関連記事には*を付し、NDL月報および本誌(NWと記述)は略記して号数を示し、*に番号を付した文献の書誌事項は文末にまとめてあります。

- 1945年4月5日 石川県金沢市の金箔職人の家に生まれる
箔製造工程に必須の紙に関心を持つ
- 1969年3月 国際基督教大学教養学部社会科学科卒業
調査して分析、考察する手法を習得
- 1969年10月 国立国会図書館(NDL)入職、図書課配属
図書の状態を観察することになる
- 1975年10月 カナダのフランス語圏にあるモントリオール大学東アジア研究所に図書館創設のために派遣される(1978年9月まで)
- 1979年2月13日 ▽『読売新聞』[世界の論調]「21世紀には読めなくなる?ボロボロ蔵書」
- 1979年8月 NDL岸田實館長に随行して国際図書館連盟(IFLA)年次大会(コペンハーゲン)に参加、酸性紙問題を知る
- 1981年6-7月 NDL植木正張館長に随行して米国図書館協会年次大会および欧米図書館歴訪、資料保存が様々な図書館で問題となっていることを知る *月報247
- 1982年10月 ▽金谷博雄『本を残す一用紙の酸性問題資料集』刊行 *1
- 1983年4月10日 『出版クラブだより』に酸性紙問題の記事執筆 問題解決には出版界との連携必須の自覚 *2
- 1983年7月 NDLに酸性紙対策班発足、班員となる。8~9月、蔵書保存調査に参加
- 1983年7月,10月 『科学技術文献サービス』に記事執筆 研究開発の重要性を認識 *3
- 1983年11月 NDLシンポジウム「紙の劣化と図書館資料の保存」<企画運営> *4
- 1984年6月 金沢工業大学ライブラリーセンター主催「資料の保存、劣化防止および修復等に関する国際セミナー」に参加
- 1984年10月 <執筆>「本の保存の新しいパラダイム」『ゆずり葉』22 p.346-350
- 1984年10月 日本図書館協会(JLA)全国図書館大会(大阪)で初の資料保存分科会<企画運営> *5
- 1985年3月 JLA内に資料保存研究会が発足 <研究会世話人> *6
- 1985年8-9月 NDL蔵書保存調査の追加・補足的調査 <調査実施、報告書執筆> *7
- 1985年10月31日 全国図書館大会(宮城) 資料保存の自主分科会 <司会> *8
- 1986年4月 ▽IFLA、コアプログラム(世界の図書館界の最優先課題に取り組む活動)の一つとして保存プログラムPAC(Preservation And Conservation)を設置
- 1986年6月 NDL、自館蔵書の保存管理とともに全国の図書館の資料保存にも取り組む常設の部署として、資料保存課と資料保存対策室を新設 対策室員となる。
- 1986年8月 NDL、国内刊行図書の中性紙使用状況を知るために新刊図書のpH値調査開始(以降毎年継続実施) <対策室員として調査を主導> *月報307

- 1986年8月 IFLA 東京大会、保存分科会<発表「日本における資料保存活動」>
- 1987年2月2日 ND L 内に誕生した資料保存を考える有志の会「BP の会」、機関誌 *Book Preservation* 創刊 <メンバーとして参加>
- 1987年3月20日 全国図書館大会（東京）資料保存分科会「本を保存するために一図書館のための保存科学」<企画運営>
- 1987年3月 科研費研究報告書『保存図書の酸性化対策に関する研究』刊行、研究分担者として研究に参加、「保存図書の分析」を担当 *9
- 1987年8月12日 『IFLA 資料保存の原則』、JLA から[シリーズ本を残す]の第1冊として刊行 *10 資料保存研究会として翻訳・解説を担当 conservation（どのように保存するか）から、preservation（誰が・何を・なぜ保存するか）へのパラダイムシフトの書と位置づける
- 1987年8月中旬 IFLA ブライトン大会（8/16-21）参加 保存分科会常任委員および PAC 諮問委員となる（2期、1995年まで） 新聞小分科会（8/13-15 ロンドン）参加
- 1987年9月 フルブライト奨学金により図書館資料の保存を研究目的としてコロンビア大学図書館学校に留学（1988年7月まで） 保存管理者養成コースを含む複数のコースを聴講しつつ、現地の資料保存機関を訪問して積極的に関係者に話を聞き歩く 会合などの機会をとらえて日本の資料保存状況も発信
- 1988年5月 ▽早稲田大学図書館「明治期資料マイクロ化計画」によるマイクロフィッシュ刊行開始 保存のための大規模マイクロ化プロジェクトのさきがけ
- 1988年8-9月 IFLA シドニー大会に参加 *月報 335
- 1988年10月27日 全国図書館大会（東京）資料保存分科会「図書館資料保存の現状と課題—国際的業際的な視野から—」<講演「資料保存のアメリカ—1959~1988—」> 分科会の最後に JLA に資料保存委員会設置への要望を満場一致で採択
- 1988年12月16日 資料保存研究会 12月定例会 <講演「コロンビア大学図書館学校の保存教育プログラム」> *『資料保存研究会ニューズレター』22
- 1989年1月25日 記録史料の保存利用に関する日英セミナー <実行委員会に特別協力、参加・通訳> 文書資料関係者との協力 *11
- 1989年3月 座談会「図書館における資料の保存」『現代の図書館』27(1) p.2-9 糸賀雅児、木部徹、二宮嘉須彦と4人で資料保存の新しい考え方について語り合う
- 1989年6月 資料保存研究会会長となる 世話人方式あらため、組織としての体制を整備
- 1989年6-7月 インドネシア出張 国際評価チームの一員として欧米豪のメンバーとともに、同国立図書館の保存計画を勧告 *『資料保存研究会ニューズレター』24
- 1989年9月 ND L、IFLA/PAC アジア地域センターに指定される <1986年東京大会で非公式の打診を受けて以来、指定に至る調整に関与>
- 1989年9月 鶴見大学図書館学特別講座Cコース資料保存開始 <講師>（1992年まで）
- 1989年10月 ND L 収集部資料保存課長となる（1992年3月まで）
- 1989年10月 全国図書館大会（宮崎）資料保存分科会「保存の新しい考え方と技術—主として郷土資料、特別コレクションをテーマに」<NDLの現況を報告> 開始間もないNDLの明治期刊行図書マイクロ化計画については、早大プロジェクトとの重複問題を指摘
- 1990年1月 ND L、「保存協力プログラム」を開始 <担当課長> PAC アジア地域センター活動の一環 国内外の図書館における保存活動の奨励・促進が目的
- 1990年3月28日 ND L、第1回資料保存シンポジウム「蔵書の危機とその対応」を開催 保存協力プログラムの一環として、以後1999年（第10回）まで実施

- 1990年4月 JLA、資料保存委員会を設置 初代委員長となる(1991年5月まで)
- 1990年6月 第8回東南アジア図書館人会議(CONSAL)に出席(ジャカルタ) 資料保存の分科会で発表「図書館資料保存のための国際的ネットワーク—IFLA/PAC コアプログラム」 *月報 356
- 1990年7月 資料保存委員会機関紙『ネットワーク資料保存』初号(第26号)刊行 <新誌名を命名、巻頭言「プロローグ」を執筆> *NW 26
- 1990年9-10月 <執筆>「蔵書劣化の謎を追う—スロー・ファイヤー探偵団の冒険(前編・後編)」『びぶろす』v. 41, nos. 9-10 保管環境が蔵書の劣化に及ぼす影響の大きさに注目した考察 留学の成果が平易な言葉で物語風にまとめられている
- 1990年10月25日 全国図書館大会(静岡)資料保存分科会「誰にでもできる資料保存のための調査と計画」 これ以降の分科会は資料保存委員会が企画運営 <NDLの現況を報告>
- 1990年12月 ▽新刊図書の中性紙使用率が7割になる *12
- 1991年2月 資料保存委員会月例研究会「マレーシア国立公文書館における保存・修復 モハメッド・ラザリ」<通訳> *NW 30
- 1991年3月 資料保存委員会月例研究会「米国における地域保存センターの活動 NEDCC アン・ラッセル」<通訳> *NW 30
- 1991年5月 IFLA/PAC 地域センター長会議(於 LC)、および IFLA・ICA・コロンビア大学図書館学校共催「保存研究に関する国際セミナー」に参加 *月報 366
- 1991年7月 <執筆>“pH Survey of Current Publications in Japan,” *CAN: Conservation Administration News*, no. 50, p. 1-2, 29 1986~1990年にかけてのNDLの新刊図書pH調査を海外の専門誌に紹介
- 1991年9月12日 全国公共図書館・関東地区公共図書館協議会整理部門研究集会「世代をつなぐ収集・保存—活用」 <基調講演「新しい資料保存の理解」> *NW 31
- 1991年10月23日 全国図書館大会(徳島)資料保存分科会「利用のための資料保存」 1984年のテーマ「保存と利用をどう調和させていくか」からの進化 利用促進のために収集、整理、保存するという新しい考え方の確認・普及を目指した <企画>
- 1991年11月 <執筆>「神話から科学へ—大量脱酸技術の再検討」『びぶろす』v. 42, No. 11, p. 1-8 開発が進んできた大量脱酸技術の適用について、蔵書を保存する立場にいる図書館員が何を検討し何を判断すべきかを論じた
- 1991年12月2日 国際交流基金文化遺産保存専門家長期派遣事業でインドネシア国立図書館に出張し、同館の蔵書保存計画策定に携わる(同月14日まで)
- 1992年9月 <執筆>「資料保存のための基準づくり—ISO/TC46/SC10の活動」『現代の図書館』30(3), p. 211-214
- 1992年10月 第5回日米大学図書館会議 <発表「資料保存と国際コミュニケーション」>
- 1993年9月12-14日 ユネスコ「世界の記憶」(Memory of the World)プログラムの第1回国際諮問委員会(ワルシャワ)に国際諮問委員として参加 MoWは当初、危機に瀕した文書資料のメディア変換による保存を目指すプロジェクトとして提案された
- 1994年3月 ▽ISO9706「耐久記録用紙の要件」 文献資料の物理的保存に関する標準化の第一弾として、紙の耐久性の国際規格が制定される
- 1994年6月13日 JLA、「資料保存ワークショップ」を開催 <基調講演「資料保存の10年—これまでとこれから」> *13
- 1995年1月27日 安江明夫、木部徹、原田淳夫編著『図書館と資料保存—酸性紙問題から10年

- の歩み』(雄松堂ライブラリー・リサーチ・シリーズ 1) 刊行
- 1995 年 2 月 21 日 <執筆>「酸性紙問題からの 10 年 資料保存へ深まる理解 使命自覚の図書館 “利用者本位” へ改善も」『読売新聞』夕刊
- 1996 年 1 月 ビデオ『利用のための資料保存』刊 (JLA 監修、紀伊国屋書店発行) <協力>
- 1996 年 7 月 日米文化教育交流会議 (米国・バークレー) 情報ハイウェイ WG 特別委員として参加 ドキュメント・デリバリーが関心を集めていた
- 1996 年 8 月 IFLA 北京大会参加 資料保存分科会<発表「神話から科学へ—大量脱酸技術の再検討」>*発表ペーパーは *IFLA Journal* 23(3)に掲載。新聞ワークショップ<発表「新聞の保存マイクロ化—国立国会図書館の経験」> *NW 46
- 1998 年 ▽IFLA/PAC、新しい資料保存の原則 *IFLA Principles for the Care and Handling of Library Materials* を発行 邦訳は『IFLA 図書館資料の予防的保存対策の原則』[シリーズ本を残す 9]として 2003 年 7 月 20 日に JLA から刊行
- 1998 年 10 月 22 日 全国図書館大会 (秋田) 資料保存分科会「資料保存のためのメディア変換—デジタル時代の資料保存戦略」<基調講演「メディア変換の why と how」> メディア変換を進める上で大切なことは「なぜ」「何を」「誰のために」保存するのかという視点を持ちながら、「いかに」行うかということだ、と論じた
- 1998 年 12 月 20 日 サリー・ブキャナン著『図書館、文書館における災害対策』[シリーズ本を残す 7]として翻訳、JLA から刊行 <監修>
- 1999 年 11 月 8 日 NDL、第 10 回資料保存シンポジウム「アジアをつなぐネットワーク—保存協力のこれから—」開催 <講演「文化協力のスス—アジアの蔵書を保存するために—」> *14
- 1999 年 国内初の商用大量脱酸サービスを日本ファイリング株式会社が開始 同社社長が大量脱酸の研究を始めた 1988 年に渡米、留学中の安江も情報提供した *NW 47
- 2000 年 1 月 5-8 日 インド文化財保存機関協議会 (ICCI) 主催研修プログラム「パームリーフ・紙資料保存技術国際 4 か月集中コース」(ブバネシュワル) に特別講師として招聘され、4 日間の集中講義「保存管理入門」を行う (2001 年 1 月にも講師) *NW61
- 2000 年 6 月 16 日 資料保存協議会第 2 回セミナー <講演「資料保存の how と why 再論」> *
https://www.hozon.co.jp/report/post_9377
- 2000 年 10 月 11 日 東京都立中央図書館資料保存委員会主催資料保存講演会 (都内公立図書館職員等対象)「資料を保存するとは?—「利用のための資料保存」入門」<基調講演「資料保存の Why と What」>
- 2001 年 9 月 <執筆>「Keep going!!」 *NW 65 (特集:資料保存の 10 年の巻頭言) 「目標を明確にすることが重要」とし、「目標設定に、資料保存を技術としてではなく機能とみる視点を組み入れ、資料保存を図書館の通常の業務として位置付ける取組みを期待したい」
- 2002 年 4 月 1 日 NDL、関西館 (京都府精華町) を開庁 関西館長となる (2003 年 3 月まで)
- 2004 年 12 月 NDL 副館長となる (2006 年 2 月まで)
- 2005 年 3 月 20 日 JLA 資料保存委員会企画『防ぐ技術・治す技術—紙資料保存マニュアル—』刊行 <協力>
- 2005 年 8 月 IFLA オスロ大会に参加 PAC アジア地域センター長代理として PAC センター長会議にも出席 IFLA ソウル大会 (2006 年) の資料保存分科会プレコンファランスの NDL への招致に向けた交渉に奔走

- 2006年2月 NDLを退職 フリーの資料保存研究者となる
- 2006年6月 専門図書館協議会（専図協）顧問就任
- 2006年6月 ベトナム国立図書館訪問、同館館長宛に資料保存計画提案書提出
- 2006年7-9月 国文学研究資料館のアーカイブズ・カレッジ受講、修了論文「ビネガー・シンドロームとマイクロフィルムの長期保存」
- 2006年8月 IFLA ソウル大会参加 *NW 82
- 2006年10月 JLA 資料保存委員会内に保存管理チーム発足 <事務局> コンサベーションと比べて進展の思わしくないプリザベーションのレベルアップを目指して新たな活動を始める。村上直子（NDL）と二人で事務局を担当し、セミナー開催、成果の刊行などに取り組む *NW 82
- 2006年10月10日 第1回資料保存委員会セミナー「第72回 IFLA 大会（東京、ソウル）資料保存関係会議の報告会」<企画運営、報告> *NW 82
- 2006年11月5-12日 インドネシア国立図書館を訪問しフォローアップ調査 12月、同館館長宛に資料保存活動評価報告書提出
- 2006年11月21日 第2回資料保存委員会セミナー「図書館における保存管理者の役割—米国イェール大学図書館からロバータ・ピレット保存部長を迎えて」インタビュー形式のセミナーで聞き手を務める *NW 82
- 2006年12月16日 国際シンポジウム：アジア・アフリカ史資料学の現在と地域文化研究 <講演「地域研究と資料保存—保存管理者の視点—」>
- 2006年12月 <執筆>「ビネガー・シンドローム問題再考：マイクロフィルムの保存のために」『現代の図書館』44(4), p.240-251
- 2007年3月 保存管理チーム、新たに代替保存班を設置 紙資料の代替保存策について、現在のデジタル環境を踏まえ、その考え方と在り方を調査・検討し、議論を集約することを目的に活動 <班長>
- 2007年4月11日 第4回資料保存委員会セミナー「調査から計画へ2 ビネガーシンドローム—おたくは大丈夫?—」<講師> *NW 84
- 2007年5月 <執筆>「マイクロフィルムの保存計画：ビネガー・シンドローム対策を中心に」『専門図書館』223, p.26-34
- 2007年10月4日 JHK/日本図書館協会共催 資料保存シンポジウム「プリザベーション・マネジメント—資料保存の新しい地平—」<基調講演「資料保存の再設計—図書館・アーカイブがその使命を果たすために」> *NW 86
- 2007年11月20日 東京大学創立130周年記念行事 東洋文化研究所シンポジウム 第3回アジア古籍保全講演会 <講演「マイクロ資料の劣化—原因と対処」>
- 2007年11月24日 ベトナム国立図書館訪問、資料保存部でスタッフを指導（12月1日まで）
- 2008年4月 新設の学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻の資料保存科目担当講師となる（2016年3月まで）
- 2008年5月25日 特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩（通称：多摩デポ）第1回通常総会 <講演「公共図書館と協力保存—利用を継続して保証するために」>
- 2008年5月 <執筆>「大量脱酸技術の展望—マネジメントの視点から—」国立公文書館『アーカイブズ』32, p.29-36 複数の大量脱酸方式が実用化されている状況下において、技術面の比較検討を行うのではなく、図書館・アーカイブズがそれら技術を保存計画にどのように組み入れるべきかを論じた
- 2008年9月19日 全国図書館大会（兵庫）資料保存分科会「マイクロ化とデジタル化—『利用の

- ための資料保存』を支えるパートナー」 <基調報告「代替保存—過去、現在、未来」およびワークショップ②「マイクロフィルムの健康診断—A-D ストリップを用いて」> *NW 90
- 2008年10月31日 第10回資料保存委員会セミナー「保存マネジメントの諸問題—バークレー・オグデン氏を迎えて—」 <企画、通訳>
- 2008年3月 <執筆>「現代に生きる図書修復の思想—「IFLA原則(1979)」を巡る考察—」『文化財保存修復学会誌』53, p. 54-66
- 2009年3月5日 『資料保存の調査と計画』JLA から刊行 <監修、執筆> JLA 資料保存委員会保存管理チームのセミナー・シリーズ「調査から計画へ」の報告内容をまとめたもの 資料保存に総合的・体系的に取り組むための参考書 *NW 91
- 2009年4月19-28日 第14回 CONSAL (ハノイ) 資料保存関係の基調講演、ベトナム各地から参加者を集めた特別研修プログラム講師、ベトナム文化省からメダル受賞
- 2009年10月18-25日 インドネシア図書館協会のセミナー <講演「国民的遺産保存における図書館員の役割」>
- 2009年10月30日 平成21年度画像保存セミナー(日本写真学会) <講演「画像技術と図書館の資料保存 -Looking backward and forward-」> *15
- 2010年3月 『資料保存のための代替』JLA から刊行 <監修、執筆> JLA 資料保存委員会保存管理チーム代替保存班の活動の成果をまとめたもの *NW 95
- 2010年5月 <翻訳> Barclay Ogden「保存計画ツールの発展—UC バークレー図書館からの報告」(特集 資料保存・修復)『専門図書館』241, p. 2-11
- 2010年10月 <執筆>「文化資源機関の保存マネジメント」日本図書館情報学会研究委員会編『図書館・博物館・文書館の連携』(勉誠出版) p. 57-71
- 2011年3月11日 ▽東北地方太平洋沖地震発生(東日本大震災)
- 2011年3月 <執筆>「デジタル・スキャナーの活用—マイクロフィルムの利便性向上策—」 *NW 97
- 2011年5月 企業史料協議会副会長となる
- 2011年5月10日 東日本大震災で被災した文書や写真資料を救済・復旧するためにボランティアグループ「東京文書救援隊」を設立、代表に就任 事務局長は資料保存分野での長年の盟友木部徹(資料保存器材) 被災資料を救う活動をする人に、救済・復旧作業に必要な資材とスキル・トレーニングを提供する(2014年1月31日まで) *toubunq.blogspot.com に活動と資料救出のノウハウ掲載
- 2011年5月28日 日仏図書館情報学会 <講演「書物の文化への特異な貢献—パーマネント・ペーパーの創始者たち—」> *16
- 2012年3月 <執筆>「蔵書の防災計画：図書館の“must”」『大学図書館研究』94, p. 32-38
- 2012年5月 第15回 CONSAL (パリ) <講演「国民的遺産の保存と普及」>
- 2013年5月 日仏図書館情報学会会長に就任(2019年5月まで)
- 2013年11月 アジア文化財修復会、マダン図書館主催 文書保存機関職員向け資料保存修復研修(ネパール・パタン) <企画調整・講演・講義> *NW 108 2010年12月および2011年4月に現地を訪問し、関係者と調整、資金調達の上実現 実技研修の講師として久芳正和(元NDL)が同行
- 2014年9月 日本資料専門家欧州協会(EAJRS)年次大会(ルーヴァン)特別セッション「文化財の保護、保存、修復」<基調講演> 在欧和古書保存ワーキンググループ

設置を提案、アドバイザーとなる。以後 2018 年にかけて各地の図書館を訪問調査してアドバイスをを行い、資料保存点検表を考案して自己点検できるようにした *NW 109,115 <https://www.eajrs.net/kosho/activities>

2014 年 11 月 21 日 東京文化財研究所主催 第 28 回近代の文化遺産の保存修復に関する研究会「洋紙の保存と修復」 <講演「近現代紙資料の保存—図書館・アーカイブズの視点」> *17

2015 年 5 月 25-26 日

ASEAN-日本図書館開発フォーラム（ヤンゴン） <資料保存関係の講師>

2016 年 5 月 <執筆>「**「遺す」でなく「活かす」：企業アーカイブズの本領**」『企業と史料』11 集 p.16-24 企業アーカイブズを「会社の歴史資産を生かすためのプログラム」と定義したいとして議論を呼び、翌年刊行の 12 集に反響とともに再掲

2017 年 7 月 <執筆>「保存「記録」はどうなっているか？」 *NW 116 貴重資料の保存処置の記録の閲覧について、博物館では可能だが図書館・文書館では不可のケースが多いとの問題提起。舶載された蘭書への関心・調査研究と繋がっている

2018 年 11 月 1 日 第 20 回図書館総合展（横浜）にて、小島浩之（東京大学経済学部資料室）とともに「参加者と作り上げる図書館員とアーキビストのための資料保存セミナー【理論と実践】 理論編」の講師

2019 年 7 月 11 日 専図協イブニングセミナー「すぐに役立つ資料保存の基礎知識」 <講師>

2019 年 9 月 EAJRS ソフィア大会 <発表「キリシタン版と日欧文化交流」>

2019 年 11 月 12 日 第 21 回図書館総合展（横浜）にて「参加者と一緒に考える「小規模図書館・アーカイブズ」のための資料保存セミナー」 <講師>

2019 年 11 月 27 日 国立女性教育会館 2019 年度「アーカイブ保存修復研修」基礎コース <講師「史資料保存の考え方と取組み方」>

2020 年 2 月 7 日 専図協イブニングセミナー「保存点検表の使い方と活かし方」 <講師>

2020 年 10 月 専図協、「保存管理自己点検表（専門図書館版）」ウェブ公開開始

2020 年 11 月 7 日 洋学史学会 2020 年度 11 月例会（オンライン開催） <発表「ドドネウス『草木誌』の書誌的研究—松平定信本篇」> 舶載蘭書研究の一環

2020 年 12 月 9 日 NDL 第 31 回保存フォーラム「戦略的「保存容器」の使い方—さまざまなカタチで資料を護る—」 <講師「近代容器の起源と「防ぐ」保存の発展」収録> 動画配信は同月 16 日から 2021 年 1 月 15 日まで

2020 年 12 月 16 日 国立公文書館、「国際公文書館会議太平洋地域支部（PARBICA）善き統治のためのレコードキーピング・ツールキット」のうち「ガイドライン 20：災害防備計画をつくる」の日本語版を作成・公開 <日本語版監修> 同ガイドライン 21「災害対応計画をつくる」も日本語版の監修を務め、公開は 2021 年 2 月 17 日

2021 年 1 月 29 日 永眠

* 1 かなやひろたか編訳『本を残す—用紙の酸性問題資料集』（かなや工房、1982） 47p.

* 2 安江明夫「「本」の寿命と保存図書館の役割—酸性紙問題によせて」『出版クラブだより』219, 1983. 4. 10, p.1-3

* 3 安江明夫「「永く残る本」に向けて—ウィリアム・J・バローの研究開発—前—、—後—」『科学技術文献サービス』65, 66, 1983. 7, 10

* 4 「「紙の劣化と図書館資料の保存」—シンポジウムの記録[含 資料]」国立国会図書館『図書館研究シリーズ』24, 1984. 3, p.125-232

* 5 「第 10 分科会 図書館資料の保存と利用とを、いかに調和させていくか—酸性紙問題を中心と

して一』『第70回全国図書館大会記録 昭和59年度』(全国図書館大会実行委員会、1985.5.10)
p. 351-386

- * 6 資料保存研究会『資料保存研究会ニューズレター』1, 1985.5
- * 7 安江明夫「調査報告 書籍用紙の酸性度と劣化」『図書館研究シリーズ』26, 1986.4, p.207-239
- * 8 「第I部 本の保存をめぐる対話—図書館へ、図書館から—」資料保存研究会・図書館フォーラム編『“保存”をめぐる対話』(図書館フォーラム、1987.4.20) p.3-20
- * 9 『保存図書の酸性化対策に関する研究』(課題番号60303025)昭和60・61年度科学研究費補助金総合研究(A)研究報告書 研究代表者 大江礼三郎(東京農工大学農学部)
- * 10 ジャンヌ=マリー・デュロー, デビッド・クレメンツ著 資料保存研究会訳・編『IFLA 資料保存の原則』[シリーズ本を残す1](日本図書館協会、1987) 63p.
- * 11 「記録史料の保存利用に関する日英セミナー」実行委員会編『記録史料の保存利用に関する日英セミナーの記録』(同委員会、1989.12.31) 94p.
- * 12 資料保存対策室「中性紙図書、7割に—新刊図書のpH値測定結果報告(第5回)—」『国立国会図書館月報』357,1990.12, p.16-17
- * 13 日本図書館協会資料保存委員会編『資料保存ワークショップ記録集:資料はいつまで利用できるのか』(日本図書館協会、1995.3.31) p.9-43
- * 14 安江明夫「文化協力のススメ—アジアの蔵書を保存するために—」『アジアをつなぐネットワーク:保存協力のこれから 第10回資料保存シンポジウム講演集』(国立国会図書館、2000.10) p.25-43
- * 15 安江明夫「画像技術と図書館・アーカイブズの資料保存」(特集 画像保存)『日本写真学会誌』73(1), 2010.2, p.3-5
- * 16 安江明夫「書物の文化への特異な貢献—パーマネント・ペーパーの創始者たち—」『日仏図書館情報研究』37, 2011, p.1-13
- * 17 安江明夫「近現代紙資料の保存—図書館・アーカイブズの視点」保存修復科学センター近代文化遺産研究室編『洋紙の保存と修復』(東京文化財研究所、2016.3) p.11-16

(こいで(やすえ) いずみ・安江明夫夫人・元渋沢栄一記念財団
こばやし なおこ・元国立国会図書館)

ネットワーク**資料保存** 第125号 2021年10月

編集・発行:日本図書館協会 資料保存委員会
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03-3523-0816 FAX03-3523-0841
URL <http://www.jla.or.jp/committees/hozon/tabid/96/Default.aspx>

文章・写真の無断転載はお断りいたします。
